山間集落における活性化要因に関する考察

—住民の意識と行動の視点から—

Study on Factors of Revitalization at the Movement of Settlements in a Mountainous Village

- With viewpoints of Residents' consciousness and behavior -

劉 鶴烈

Hagyeol YOU

(東京農工大学大学院連合農学研究科)

(United Graduate School of Agricultural Science, Tokyo Univ. of Agr. and Tech)

I 研究の背景と目的

今日、多くの山村は人口の自然減をともなって過疎化が進んでいる。「このような状況において、将来の日本にどのような姿の農山村を残し、また再生させるかを問うことは、喫緊の課題となっている」(松岡、1998)。こうした課題の解決に向けた様々な「農村活性化(むらづくり)」運動が各地で行われている。

農村活性化の要因に関する既往の研究においては、おおむね地域経済、地域農業の側面から分析した研究が多くみられるが、地域住民の意識、行動という視点から活性化要因を明らかにした研究は少ない。

例えば、地域の住民はどのような要因で活力を高めたのかを考察したもの(長谷山、1998)、地域活力の向上のための方策と基底的な要件を住民意識の視点から考察したもの(長谷山、1995)などがある¹⁾。

しかしながら、これらの研究では、幾つかの要因が析出されたものの、これらの要因は、地域活性化が進んでいる幾つかの優良地域の固有の条件から生み出した特殊な要因であり、それ以外の地域(集落)でも通用する要因とはいえない。このようなことから筆者は、より幅広い地域に通用する活性化要因を析出することを目的に、集落活性化に向けて近年、活発に動き始めている福島県伊南村大桃集落を取り上げ、住民の意識と行動の視点から調査・分析を行った²⁾(劉・千賀、2002)。

それによれば、大桃集落では活発な住民組織活動とともに多様な集落行事が企画、実行されるなど、集落の活力を取り戻しつつあることが示され、その要因として次の点が明らかとなった。

すなわち、①集落の諸問題に対する住民の危機意識や自覚、②地域への愛着、③住民間の活発な

交流と根強い団結心、④地域リーダーの存在、の4つの要因³⁾である。

そこで、本稿では大桃集落で析出された4つの活性化要因が他集落でも通用するかどうか検証することを課題としている。この課題に接近するために、伊南村全集落における住民アンケート調査により定量的な比較・考察を行い、さらに、比較対象集落の実態調査(聞き取り調査、文献調査)により、定性的な比較・考察を加えた。これらを通じて、山村集落における活性化要因を住民の意識と行動の視点から明らかにする。

II 研究の手法

本調査・分析は、2002年9月から同年12月にかけて、伊南村住民の意識把握(アンケート調査)→比較対象集落選定→集落活性⁴⁾の集落間比較→活性化要因の集落間比較という順で行った。

アンケートの設問は、過去40年間の①住民間の交流、②住民間の団結力、③地域への愛着、④住民組織活動、⑤集落行事の実態について、それぞれ1960年代から現在まで(2002年)10年ごとに、回答者に5段階評価(1～5)を求めた⁵⁾。

(回答者の年齢が若い場合は、回答できない年代があるので回答者数は年代ごとに異なっている)。また、調査時点においての⑥若年層の集落活性化への活動、⑦地域リーダーの存在認識、⑧集落づくりへの住民参加意向、⑨地域課題への問題意識、の各項目を加えた(詳細な質問及び回答選択肢については後述する)。

そして、大桃集落と対照的な位置にある集落を選定して比較するため、アンケート調査で得られた定量的データを用いて主成分分析を行い、比較対象集落を選定した。

実態調査では、大桃集落と比較対象集落において、住民組織活動、集落行事及び地域リーダーの実態を把握するために聞き取り調査及び文献調査を行った。

Ⅲ 結果と考察

(1) アンケート調査の回答者の属性

アンケート調査票は、伊南村全世帯（各世帯 1 部）を対象に 588 部を配布、298 部が回収された（回収率 50.68%）。回答者の属性⁽⁵⁾をみると、男性が 206 人（65.5%）、女性が 92 人（34.5%）で、年齢層は 50 代が最も多く（28.9%）、60 代（27.2%）、70 代以上（26.2%）、40 代（10.4%）の順である。

(2) 比較対象集落の選定

比較対象集落を選定するために主成分分析を行った。表 1 に示したデータ（アンケートの設問）を用いて分析を行ったところ、2 つの主成分（累積寄与率 73.52%）が捉えられた（表 2）。

表 1 主成分分析に用いたデータ

項 目	数値	項 目	数値
①住民間の交流	(1.5)*	⑥若年層の活動	% ^(注 7)
②住民間の団結力	(1.5)*	⑦地域リーダーの存在	% ^(注 8)
③地域への愛着	(1.5)*	⑧活動への参加意向	% ^(注 9)
④住民組織活動	(1.5)*	⑨地域課題への問題意識	% ^(注 10)
⑤集落行事実態	(1.5)*		

注：*印は過去 40 年間の住民評価値（5 段階評価）の平均値である

表 2 主成分分析の結果①（累積寄与率）

主成分	固有値	寄与率	累積寄与率 (%)
①	5.309	58.98	58.98
②	1.309	14.54	73.52
3	0.915	10.17	83.69

表 3 にみるように、第 1 主成分では住民組織活動、住民間の交流、住民間の団結力、地域への愛着、集落行事実態、若年層の活動、地域リーダーの存在といった変数との相関が高く、第 2 主成分では住民参加意向、地域課題への問題意識との相関が高いことがわかる。

こうした結果から第 1 主成分を地域住民のコミュニティの活動力を表す指標として、第 2 主成分を地域課題に対する自覚と解決に向けた住民の意思を表す指標として捉えた。

表 3 主成分分析の結果②（因子負荷量）

項 目	成 分		
	1	2	3
住民組織活動	0.850	0.003	-0.473
住民間の交流	0.862	0.001	0.001
住民間の団結力	0.849	-0.104	0.384
地域への愛着	0.882	-0.308	0.009
集落行事実態	0.821	-0.001	-0.437
若年層の活動	0.944	-0.010	0.124
地域リーダー存在	0.810	0.002	0.362
住民参加意向	0.425	0.676	-0.301
住民問題意識	0.137	0.857	0.331

そこで、各主成分を得点値に換算し、第 1 主成分と第 2 主成分をそれぞれ X、Y 軸にして描かれる散布図を作成した（図 1）。そこから大桃集落と対照的な位置にある O、S 集落を比較対象集落として選定した。

図 1 各集落の散布図

(3) 集落活性の集落間比較

1) 住民組織活動の集落間比較

過去 40 年間の住民組織活動に関する住民の評価を把握するため、アンケートの設問④すなわち、「あなたの集落での住民組織活動はどうでしたか」という質問をし、5 段階評価（5：非常に活発な活動～1：全然活動ない）を求めた。その結果、図 2 のようにほとんどの集落で 1970 年代以前までは活発な活動が行われてきたが、それ以後、組織活動が低下していく傾向がみられた。

しかし、大桃集落は多少低下してきたものの、O、S 集落に比べれば比較的活発な住民組織活動が行われてきたと評価される（大桃集落と O 集落及び S 集落と間で住民評価値は Mann-Whitney の U 検定で 1%有意差あり。以下「有意差あり」という）。

注) 縦軸の数値は、住民組織活動に関する住民の5段階評価値である
(5:非常に活発な活動、4:活発な活動、3:どちらともいえない、2:あまり活動ない、1:全然活動ない)

図2 住民組織活動の集落間比較

なお、住民組織活動の実態を聞き取り調査及び文献調査の結果により比較したのが表4である。大桃集落には、自治会、老人会、婦人会、青年会、子供会、「心のふるさと創造実行委員会（以下「実行委員会」という）」といった住民組織があり、そのうち自治会、老人会、婦人会、「実行委員会」の活動がとくに目立っている。

自治会は、総会などの集落基本運営や村（役場）との行政連絡機能、年中行事の主管などを担っている。老人会、婦人会は集落にある神社や大桃舞台^{註1)}の管理などのボランティア活動と集落行事への協力、そして集落の特産品（「キノコ味噌」）を生産販売している。そして、「実行委員会」は基本的に個人参加方式で既存の住民組織では解決できなかった未来志向的な課題に取り組み、集落独自のまつり、イベントを企画、実行するなど集落活性化への主導的な役割を果たしている。

これに対し、O集落とS集落では、1970年代後半に集落独自の組織であった青年会と婦人会が

表4 住民組織の活動比較

組織名	大桃集落	O集落	S集落
自治会	総会、行政連絡、年中行事 主管、集落イベントに協力	総会 行政連絡	総会、行政連絡 年中行事主管
老人会	奉仕活動、親睦旅行	奉仕活動	奉仕活動
(支)	特産品生産	親睦旅行	親睦旅行
婦人会	集落イベントに協力	活動なし	活動なし
(支)	特産品販売		
青年会(支)	村行事に協力	活動なし	村行事に協力
子供会	奉仕活動	組織なし	組織なし
実行委員会	集落イベントの企画、実行	組織なし	組織なし

注: 1) 聞き取り調査により作成

2) 上記の住民組織以外に、各集落には消防団、婦人消防団がある。

3) (支)は伊南村の各集落支部を示す

自然消滅して以後、住民組織活動が沈滞している。現在は、自治会と老人会だけが活動を行っている程度で、他の組織は加入者も少なく目立った活動を行っていない。

2) 集落行事実態の集落間比較

過去40年間の集落行事（年中行事及び集落イベントを含む）に関する住民の評価を把握するため、アンケートの設問⑤すなわち、「あなたの集落での集落行事はどうでしたか」という質問をし、5段階評価（5:非常に活発に行う～1:全然行っていない）を求めた。

その結果、図3のように集落行事に対する住民評価値の変化も、前述の住民組織活動とほぼ同様の傾向をみせている。大桃集落は1990年代までは少し低下してきたものの、1960年代から常にO、S集落よりも高い評価値を示し、1990年代を起点に評価値が上昇していることに注目したい（有意差あり）。

注) 縦軸の数値は、集落行事に関する住民の5段階評価値である

(5:非常に活発に行う、4:活発に行う、3:どちらともいえない、2:あまり行っていない、1:全然行っていない)

図3 集落行事実態の集落間比較

表5は、年中行事、集落イベントといった集落行事の実態を聞き取り調査及び文献調査により集落間比較したものである。

O集落とS集落の場合、1980年代までは、多様な伝統年中行事が行われてきたが、それ以後、消滅または中断された。現在は社寺普請、山道普請などといった集落住民の共同作業が行われている程度であり、また独自のイベントもない。

これに対し、大桃集落では、伝統年中行事の一部^{註1,2)}が1970年代以前に中断または消滅したものの、歳の神、雷神祭、地蔵講など多様な伝統行事が、今日まで維持・保存され活発に行われている。2000年代に入ってから、大桃舞台の復活やキノコ園、雪祭典など集落独自のイベントが住民組織により創案、実行されるようになった。

表5 集落行事の実態比較

	大桃集落	O集落	S集落
年	歳の神、堰普請、雷神祭、	社寺	社寺普請、堀弘い
中	駒ヶ岳代参、旧節句、	普請	山道普請、
行	愛宕御祭礼、二百二十日、		三区普請
事	焼日、天神講、地藏講		鹿島神社祭礼
イベ	雪祭典(2001)、キノコ園	なし	なし
ント	(2000)、秋の祭り(2001)他		

注：1)聞き取り調査により作成

2)上記の集落行事は、2002年に各集落で実際に開催された行事・イベントである。()の中の数字は行事創始年度を意味する。

以上のように、大桃集落と比較対象集落の間には、集落活性(住民組織活動、集落行事)に顕著な差が生じている。次節では、これらの結果を踏まえながら4つの活性化要因を集落間で比較、分析する。

(4) 活性化要因の集落間比較

1) 住民の問題意識と参加意向

図4は、アンケートの設問⑨すなわち、「集落が抱えている問題や課題はどうすれば解決に向かうのかを考えたことがありますか」という質問に関する結果を示したものである。

図4 問題意識の集落間比較

“常に考えている”と答えた回答者の比率をみると、大桃集落は52.2%で、O、S集落の22.2%、40%と比べて高い。

そして、アンケートの設問⑩すなわち、「集落の活性化のための学習活動や座談会、行事などを行う場合、あなたは参加しますか」という質問に、大桃集落住民の93.6%が“参加する”と答えたのに対し、O集落では55.6%、S集落では56.3%にとどまり、大桃集落住民の集落づくりへの参加意向は他の集落より著しく高い水準をみせている(有意差あり)。こうした結果から、大桃集落住民は地域活動に主体的に取り組む姿勢が他集落より強いといえる。

2) 地域への愛着

図5は、アンケートの設問⑪すなわち、「あなたの集落住民は地域への愛着はどうでしたか」という質問に、5段階評価(5:非常に強い~1:非常に弱い)を求めた結果を示したものである。

1960年代までは、どの集落でも地域への愛着は比較的高かったが、それ以後次第に低くなっている。しかし、大桃集落の場合、多少は低下傾向がみられるものの、常にO、S集落より強い地域への愛着が維持されている(有意差あり)。

注：縦軸の数値は、地域への愛着に対する住民の5段階評価値である

(5:非常に強い、4:強い、3:どちらともいえない、2:弱い、1:非常に弱い)

図5 地域への愛着の集落間比較

地域に愛着を感じている理由としては、“長年住み慣れているから”、“近所の人々と気心が知れているから”、“集落に自慢できる資源(自然、文化財など)があるから”という順で答えが多かった。

3) 住民間の交流と団結力

図6は、アンケートの設問⑫、⑬すなわち、「あなたの集落では、住民間の交流(近所付き合いなど)と団結力はどうでしたか」という質問に、5段階評価(5:非常に活発な・非常に強い~1:全然交流しない・非常に弱い)を求めた結果を示したものである。

1960年代までは、全集落で住民の間に活発な交流や強い団結力をみせていたが、それ以後、急激に低下していく傾向がみられる。しかし、大桃集落の住民は常にO、S集落の住民より活発な交流と強い団結力を維持していると住民が評価している(有意差あり)。

その理由としては、かつて大桃集落内では緊密な親族関係が形成⁽¹³⁾されてきたこと、住民間の相互労働交換⁽¹⁴⁾が多かったことおよび村のなかでも最も厳しい生活条件下(地理的、交通面など)

にあったため、住民相互間の協力が求められたこと、などが考えられる。

注：縦軸の数値は、住民間の交流と団結力という2つの項目に対する5段階評価値の単純平均値である（5：非常に活発な交流・非常に強い、4：活発な交流・強い、3：どちらともいえない、2：あまり交流しない・弱い、1：全然交流ない・非常に弱い）

図6 住民間交流と団結力の集落間比較

4) 地域リーダーの存在認識

図7は、アンケートの設問⑦すなわち、「あなたの集落には、集落活性化のために熱心に活躍しているリーダーが存在していますか」という質問に関する結果を示したものである。大桃集落住民の81.8%が「存在する」と答えたのに対し、O集落は11.1%、S集落は20%にとどまり顕著な差をみせている（有意差あり）。

図7 地域リーダーの集落間比較

そして、アンケートの設問⑥すなわち、「あなたの集落の若年層（20～40代）は、集落の活性化のために積極的に集落のことに関心をもって活発に活動していると思いますか」という質問で、「思っている」と答えた回答者の比率をみると、大桃集落は56.5%で、O、S集落の0%、6.3%に比べ著しく高い（有意差あり）。このように、大桃集落では若年層のリーダーが積極的に集落活性化に向けて動いていると集落住民が評価している。

表6は、聞き取り調査の結果から各集落のリーダーの実態を表したものである。O・S集落のリーダー層は自治会の役員中心の長老層であり、若年層で地域リーダー的な役割を担っている人はほとんどいない。

大桃集落では近年、集落の長老層の保守的・閉鎖的な集落運営に疑問や不満が高まり、地域リーダー層は未来指向的な意識を持つ若年層へ世代交代が進み（劉・千賀、2002）、自治会中心の長老層と、住民組織（とくに「実行委員会」）のリーダーである若年層が互いに協力しながら集落を運営している。

表6 地域リーダーの実態比較

	大桃集落	O集落	S集落
リーダー層	長老層＋若年層 区長、役員 住民組織リーダー	長老層 区長	長老層 区長、役員
若年層のリーダー	有（多数） Uターン者が多い	いない	いない

注：1) 聞き取り調査により作成

2) ここでの若年層とは、20～40代の年齢層を示す。

3) 大桃集落のUターン者は最近10年間で10世帯の26人。

以上のように、大桃集落と比較対象集落との集落活性及び活性化要因を比較分析した結果、大桃集落と比較対象集落の間には、顕著な差が生じていることがわかった。こうしたことからI章で掲げた4つの要因が、山村集落活性化の一般的な要因であることはいえないものの、本調査を行った山村地域に限定してみると通用性がある要因として認められた。

IV 結論—成果および課題

本研究で検証された4つの要因、すなわち、①集落の諸課題に対する住民の問題意識、②地域への愛着、③住民間の交流と団結力、④地域リーダーの存在は、少なくとも本調査を行った山村地域において、活性化（再活性化）を進めていく上での重要な要因であり、その要因を地域住民の活力を図る指標として用いれば、集落ごとの住民の活力を測定することができ、活性化に向けての展開可能性を評価することができることが示唆された。これが本研究の成果である。

これらの要因をより一般化するために、さらに多くの事例検証を通じて、沈滞している山村集落における住民の活力を把握できるような評価指標

と評価手法を確立していくことを今後の研究課題としたい。また、どのような条件により住民の活力が向上していくのかについての考察と本稿で試みた歴史的分析アプローチ（過去 40 年間の住民意識の変遷過程分析）の有効性を高めていく手法についても次の研究課題である。

謝辞：なお、本稿は東京農工大学の矢口芳生助教授と千賀裕太郎教授のご指導を頂きながら作成した。

【注】

注 1) 既往の研究では、活性化要件として、“地域住民間の共同目標意識形成、信頼関係、活発なコミュニケーション、思いやり”などがあげられている。

注 2) 大桃集落において 2001 年 9 月～2002 年 4 月にかけて聞き取り、アンケート、文献調査を行った。

注 3) 4 つの要因以外に「適切な課題提起」も析出されたが、これは要因①に含まれるものとして扱った。

注 4) ここで「集落活性」とは、集落独自の年中伝統行事と集落住民が自主的に取り組んでいる住民組織活動（イベント、奉仕、文化、学習活動など）の活発さをいう。

注 5) 過去のことを問う質問には、回答の信頼性が乏しくなる可能性が高いので危険性を減らすための手法が求められる。本調査では、危険性を少しでも減らすために、調査票に回答者が記憶がある限りの範囲で答えるよう説明文を添書しておいた。

注 6) 調査時点の人口構成比をみると、男子が 47.1%、女子が 52.9% に比べ回答者では男子に偏っている。そして、年齢層では 40 代と 70 代以上では人口構成比とほぼ同様であるが、50 代（構成比 14.5%）、60 代（構成比 17.9%）では実際の構成比より回答者の比率が高い。本調査では、一世帯一人に制限したため、回答者の意識が全住民の意識をそのまま反映しているとは必ずしもいえない。

注 7) 「あなたの集落の若年層（20 代～40 代）は、集落の活性化のために積極的に集落のことに関心を持って活発に活動していると思いますか」という質問に、“思っている”と答えた者の比率。

注 8) 「あなたの集落には、集落活性化のために熱心に活躍しているリーダーが存在していますか」という質問に“存在する”と答えた者の比率。

注 9) 「集落の活性化のための学習活動や座談会などが行われる場合、あなたは参加しますか」という質問に“参加する”と答えた者の比率。

注 10) 「集落が抱えている問題や課題はどうすれば解決に向かうのかを考えたことがありますか」という質問に“常に考えている”と答えた者の比率。

注 11) 大桃舞台が建てられた年度は不詳であるが、明治 28 年に再建された国指定の重要有形民俗文化財である。大桃舞台では、かつて多くの農民歌舞伎が行われてきたが、1980 年代から使われなくなった。

注 12) 例えば、「厄落し」と「エベス講」などがあげられる（祖父江、1972）。

注 13) 現在も、大桃集落では「星」・「平野」という 2 つの姓が多いが、古くはこの 2 つの姓によって集落が構成されていた（祖父江、1972）。

注 14) 大桃集落では、相互労働交換は「ユイ」という名称で呼ばれており、原則として、1 人 1 日単位の労働の交換であった。1970 年代には集落の約 8 割の世帯（戸）で「ユイ」が行われた（祖父江、1972）。

【引用・参考文献】

- 祖父江、1972、『明治大学社会関係ゼミナール報告』第 9 集（上）、明治大学政経学部
- 梶井 功、1991、「中山間農村活性化の視点」『土地と農業』、No.21
- 長谷山俊郎、1995、「中山間地域の地域活力向上の方策」、農業および園芸、第 70 巻 第 1 号
- 中川雄二、1996、「中山間地域における農業農村の維持活性化のための地域システムの構築」、農業経営研究 第 33 巻 第 4 号
- 長谷山俊郎、1998、「地域組織と地域活動の再構築」『農村地域組織の役割と課題』農村環境整備センター 農村地域組織研究会
- 松岡昌則（日本村落研究会編）、1998、『山村再生 21 世紀への課題と展望』農山漁村文化協会
- 矢口芳生、1999、『中山間地域振興の在り方を問う』、農林統計協会
- 長谷川昭彦、2002、「20 世紀後半農村の生活状態の変化」、村落社会研究、第 8 巻 第 2 号
- 劉 鶴烈・千賀裕太郎、2002、「住民主導型集落づくりの起動期の実態に関する考察」、農村計画論文集、第 4 集

The purpose of this study is to clarify the factors of the "Revitalization of Settlements in a Mountainous Village" with viewpoints of residents' consciousness and behavior. For this purpose, the change and actual conditions of the resident's organizations, settlement activities, resident's initiative were investigated in the research area.

Consequently four elements were extracted as below 1) The sense of crisis to the decline of the settlement, and resident's participation in revitalization movement of settlements., 2) The attachment to native places, 3) Intimate communication and cooperative spirit among residents, 4) Existence of younger leaders